

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530909

研究課題名(和文) 青少年の生活不安と攻撃行動に関する発達臨床心理学的研究

研究課題名(英文) The study of developmental and clinical psychology about life anxiety and aggressive behavior in adolescence

研究代表者

藤井 義久 (Fujii, Yoshihisa)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：60305258

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本の生徒(中1～高3)1074名を対象にして、「中高生用生活不安尺度(LASS)」を開発した。そして、LASSを用いて、生活不安は女子及び高学年において高いこと、生活不安水準が上昇すると自殺リスクが高まること、生活不安と攻撃性は密接に関連しており特に「敵意」と関連の強いことが明らかになった。次に、日本と北欧諸国の児童生徒(10歳～15歳)1583名を対象にして、「国際版児童生徒用生活不安尺度」を開発し、友達関係不安と教師関係不安においては北欧諸国の方が、自己能力不安においては日本の方が有意に高いこと、特に教師との関係性が他者への攻撃行動を増やす大きな原因になっていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：For 1,074 Japanese students (7th to 12th grade), "Life Anxiety Scale for Students (LASS)" was developed. And using by LASS, results were as follows: (1) Life anxiety is high in girls and in upper grades, (2) When the life anxiety increases, the stronger suicide risk, (3) Life anxiety and aggression are closely related.

Next, for Japan and child student (10 years old - 15 years old) of Nordic countries 1,583, it developed "the Life Anxiety Scale for Children in the international Edition", and it became clear that Nordic countries were significantly higher in Japan in the self ability anxiety in friend relations anxiety and the teacher relations anxiety particularly to become the big cause that the relationship with the teacher increased the attack actions to others.

研究分野：臨床心理学

キーワード：生活不安 攻撃行動 怒り 青少年

1. 研究開始当初の背景

- (1) 文部科学省(2010)の統計によると、2009年度、児童生徒の暴力行為発生件数は60913件と過去最高となった。また、内閣府(2009)の統計によると、2008年度、小学生を含む生徒・学生の自殺数も、972件と過去最高となった。このように、方向性に違いがあるにしろ、どちらも攻撃行動としてまとめることができる青少年の暴力行為も自殺も極めて深刻な状況にある。
- (2) 研究代表者は、これまで「数学不安尺度」(藤井,1994)、「テスト不安尺度」(藤井,1995)、「就職不安尺度」(藤井,1999)、「犯罪不安尺度」(藤井,2009)などの研究開発に当たってきたが、これらの不安尺度では青少年が日々感じている「生活不安」を一面的には測定できて多面的に測定することはできない。青少年の「生活不安」を多面的に測定できる尺度としては、唯一、研究代表者が開発した「大学生生活不安尺度」(藤井,1998)があるが本尺度を開発してから10年以上経過しており改訂すべき時期にきていること、本尺度はあくまで大学生を対象にした尺度であるといった理由から、中高生に対しては実施できない状況である。
- (3) 北欧諸国では、国全体で子どもを見守る体制が出来上がっているため、日本のように、青少年の暴力行為も自殺も深刻な問題となっていない状況にある。

2. 研究の目的

- (1) 中学生および高校生を対象に、臨床現場で活用できる「生活不安尺度」を開発し、その信頼性、妥当性について検討するとともに、我が国における青少年の「生活不安」の発達的变化について検討する。
- (2) 生活不安、怒り感情、攻撃行動との関連性について多変量解析によって分析することにより、青少年の攻撃行動を生み出すメカニズムについて解明する。
- (3) 日本だけではなく、フィンランド、デンマーク、スウェーデンといった北欧諸国の児童生徒も対象にして、青少年の生活不安と攻撃行動について国による違いが見られるかどうか、国際比較によって明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 青少年の生活不安と攻撃性に関する調査 調査対象

中学1年生から3年生516名(男子270名、女子246名)、高校1年生から3年生558名(男子195名、女子363名)計1,074名(男子465名、女子609名)を対象とした。

調査手続

各学級ごとに学級担任が以下の内容から構成された質問紙を配布し、一斉に回答を求め、回答終了後、直ちに質問紙を回収する方

式で調査が実施された。なお、回答を始めるに当たって、倫理的配慮の観点から、「本調査は、学校の成績と全く関係のないこと」、「答えたくない質問に対しては答えなくてもよいこと」など、文書及び口頭によって調査対象者に伝えた。

調査内容

- ・ **生活不安に関する項目**：藤井(1998)が開発した「大学生生活不安尺度」を参考に、中高生の生活不安の測定を目的として作成した32項目を用いた。なお、回答方法は、5件法(自分と全く違う - 自分にぴったり当てはまる)である。
- ・ **うつに関する項目**：村田ら(1996)が開発した「日本版児童用抑うつ尺度(Depression Self-Rating Scale for Children ;DSRS)」(18項目)を用いた。なお、回答方法は、3件法(そんなことはない - いつもそうだ)である。
- ・ **自殺念慮に関する項目**：「最近、死にたいと思ったことがあるか」という質問に対して、3件法(全くない - よくある)で回答を求め、「自殺念慮傾向」について調べた。
- ・ **攻撃性に関する項目**：Buss & Perry(1992)が作成した尺度について日本標準化を行った安藤ら(1999)の「日本版 Buss - Perry 攻撃性質問紙(Buss - Perry Aggression Questionnaire;BAQ)」(24項目)を用いた。なお、回答方法は、5件法(自分に全く当てはまらない - 自分に非常によく当てはまる)である。

(2) 児童生徒の生活不安に関する国際比較

調査対象

日本864名(男子437名、女子427名)、デンマーク305名(男子137名、女子168名)、フィンランド275名(男子126名、女子149名)、スウェーデン139名(男子68名、女子71名)計1583名(男子768名、女子815名)の児童生徒(10歳~15歳)を対象とした。なお、各国間において調査対象者数および調査対象者数の平均年齢に偏りが見られるので、本研究では、デンマーク、フィンランド、スウェーデンの児童生徒をまとめて北欧諸国の児童生徒719名(男子331名、女子388名)とし、日本の児童生徒と国際比較することにした。

調査手続

各国とも、担任によって、以下の内容から成る質問紙を児童生徒に配布し、一斉に回答を求め、回答終了後、直ちに回収する方式で質問紙調査が実施された。なお、北欧諸国においては、子どもの人権を守る趣旨から、校長の許諾だけで児童生徒に対して質問紙調査を実施することできず、保護者の同意が得られた児童生徒に対してのみ調査実施が許されることになっている。そのため、北欧諸国の各学校においては事前に保護者説明会を開催し、保護者に本調査の目的および内容についてよく説明した上で、子どもの調査協

力に同意できるかどうか文書で保護者に回答を求めた。その結果、保護者からの同意が得られた児童生徒に対してだけ調査用紙を配布した。

調査内容

- ・生活不安に関する質問：児童生徒が日常生活において感じている生活不安に関する自由記述調査によって収集された 32 項目を用いた。なお、回答方法は、5 件法（全く不安でない - とても不安である）である。
- ・簡略版児童生徒用怒り尺度：藤井(2008)が場面に応じて変化する怒り水準の測定を目的として開発した尺度を用いた。なお、回答方法は、5 件法（全くカッとしない - とてもカッとしない）である。

4. 研究成果

(1) 青少年の生活不安と攻撃性について 中高生版生活不安尺度の開発

主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、固有値の変化および解釈可能性から 3 因子解が妥当であると判断した。しかし、二重負荷の見られた項目が 6 項目あったので、それらを削除し、残った 26 項目について同様の因子分析を行ったところ、3 つの因子間で項目数に違いが見られた。そこで、各下位尺度得点間の単純比較を可能にするために、各因子ごとに因子負荷の高い項目から順に 6 項目ずつ抽出することにより、因子ごとの項目数を均等になるようにした。そして、最終的に残った 18 項目の因子構造について検討するために、再度同様の因子分析を行った。その結果、3 因子構造は変わらず、各因子ごとの項目数も 6 項目ずつとなり、しかも新たに二重負荷の見られる項目も存在しなかったため、最終的に表 1 に示すように、3 つの下位尺度、各 6 項目ずつ計 18 項目で尺度を構成することにした。

まず、第 1 因子は、「犯罪に巻き込まれたらどうしよう」、「病気をしたらどうしよう」といった、将来起こるであろう問題に対して悪い結果を予想する予期不安に関する項目に高い因子負荷が見られるので、「予期不安因子」と命名した。第 2 因子は、「成績のことを考えると不安だ」、「成績のことが気になって仕方ない」といった、何らかの成績評価に対する不安に関する項目に高い因子負荷が見られるので、「評価不安因子」と命名した。第 3 因子は、「この学校にいると不安になる」、「学校に行きたくないと思う」といった、学校に対する何らかの不安から生じる学校不適応に関する項目に高い因子負荷が見られるので、「学校不適応因子」と命名した。

以上の 3 つの下位尺度、計 18 項目から成る尺度を今後「中高生版生活不安尺度」(Life Anxiety Scale for Students), 略して LASS と呼ぶことにした。なお、3 つの下位尺度間における相関は、表 2 に示すとおり、.42 から .50 で中程度の値を得た。

表 1 LASS の因子分析結果

項目内容	負荷量
(. 予期不安因子)	
・犯罪に巻き込まれたらどうしよう	.75
・病気をしたらどうしよう	.73
・家族に何かあったらどうしよう	.72
・困難に直面した時、どうしよう	.70
・困難を乗り越えられるか不安だ	.63
・将来のことを考えると不安だ	.61
(. 評価不安因子)	
・成績のことを考えると不安だ	.76
・成績のことが気になって仕方ない	.76
・テスト中、頭が真っ白になる	.65
・受験に失敗したらどうしよう	.59
・行きたい所に就職できるか不安だ	.59
・テスト前になると、不安になる	.57
(. 学校不適応因子)	
・この学校にいると不安になる	.71
・学校に行きたくないと思う	.62
・先生が近くにいと気になる	.61
・先生と話をする時、緊張する	.59
・先輩とうまくつき合えるか不安だ	.55
・先生から「職員室に来るように」と言われたら不安だ	.48

表 2 LASS の下位尺度間の相関係数

	予期不安	評価不安	学校 不適応
予期不安		.50***	.42***
評価不安			.49***
学校不適応			

*** $p < .001$

LASS の信頼性の検討

各下位尺度ごとにクロンバックの係数を算出したところ、「予期不安」が .87, 「評価不安」が .86, 「学校不適応」が .88 であり、尺度全体でも .73 という値を示した。このことから、本尺度には、一定の信頼性が備わっていることが確認された。

LASS の妥当性の検討

生活不安水準と、うつ傾向および自殺念慮との関係について、男女別に²検定によって分析することを通して、LASS の妥当性の検討を行った。なお、生活不安については、LASS の合計得点によって 3 群、すなわち低群 (25 点以下)、中群 (26 点 ~ 34 点)、高群 (35 点以上) に分けた。また、うつ傾向については、DSRS のカットオフポイントである 16 点以上であるかどうかにより、2 群 (低群と高群) に分けた。さらに、自殺念慮については、「死にたいと思ったことがあるかどうか」により、2 群 (低群と高群) に分けた。

まず、生活不安水準とうつ傾向との関係であるが、²検定の結果、男子 ($\chi^2(2)=39.08, p < .001$), 女子 ($\chi^2(2)=54.49, p < .001$) とともに、有意差が確認された。すなわち、図 1 に示す通り、男女とも、生活不安水準の高い群

ほど、うつ傾向の強い生徒の割合が有意に高いことが明らかになった。

次に、生活不安水準と自殺念慮との関係であるが、 χ^2 検定の結果、男子($\chi^2(2)=44.22, p<.001$), 女子($\chi^2(2)=47.30, p<.001$)ともに、有意差が確認された。すなわち、図2に示す通り、生活不安水準の高い群ほど自殺念慮傾向の強い生徒の割合が高いことが明らかになった。

以上の結果は、一般的に考えられている傾向と一致していることから、本尺度には、一定の妥当性が備わっていると言える。

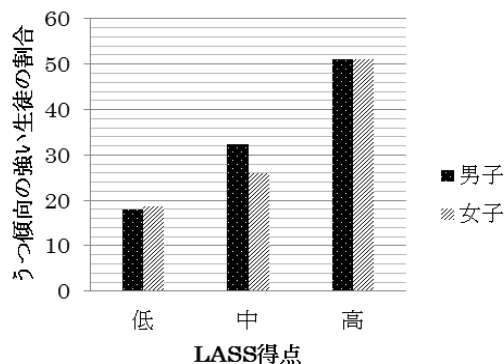


図1 LASS得点とうつ傾向との関連性

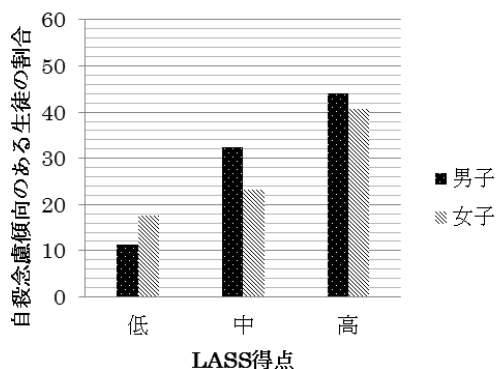


図2 LASS得点と自殺念慮との関連性

生活不安の性差と学年差の検討

LASSの各下位尺度ごとに、二要因分散分析(性×学年)を実施した。その結果、「学校不適応」を除くすべての下位尺度及び全体得点において性別の有意な主効果(予期不安: $F(1,1068)=11.27, p<.001$; 評価不安: $F(1,1068)=7.21, p<.001$; 全体得点: $F(1,1068)=10.70, p<.001$)を認めた。すなわち、「学校不適応」を除くすべての下位尺度及び全体得点においては、女子が男子よりも一貫して高い得点を示した。

一方、学年差については、すべての下位尺度及び全体得点において有意な主効果(予期不安: $F(2,1067)=5.58, p<.001$; 評価不安: $F(2,1067)=9.93, p<.001$; 学校不適応: $F(2,1067)=3.73, p<.01$, 全体得点: $F(2,1067)=5.91, p<.001$)を認めた。そして、Tukeyによる多重比較を行ったところ、「予期不安」

「評価不安」、「学校不適応」とも、中学3年生の得点が他の学年に比べて有意に高かった。そして、全体得点でも同様の傾向が見られた。図3に、生活不安得点(全体)の発達の变化を示す。

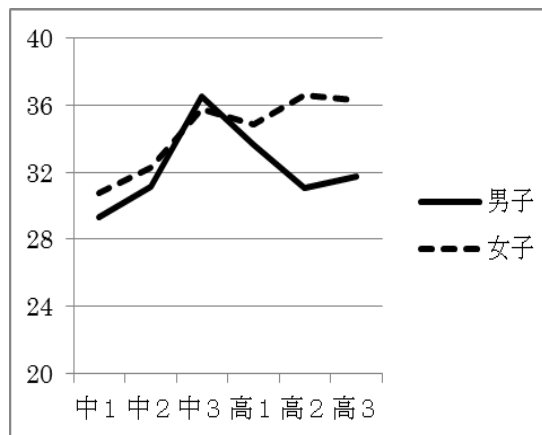


図3 生活不安得点(全体)の発達の变化

攻撃性の性差と学年差の検討

BAQの各下位尺度ごとに、二要因分散分析(性×学年)を実施した。その結果、「短気」($F(1,1068)=4.83, p<.05$)、「身体的攻撃」($F(1,1068)=60.05, p<.001$)および「全体得点」($F(1,1068)=14.36, p<.001$)において有意な性の主効果(男子>女子)が、「敵意」($F(2,1067)=3.19, p<.01$)および「言語的攻撃」($F(2,1067)=7.94, p<.001$)において有意な学年の主効果(高3が高い)が確認された。図4に、攻撃性得点(全体)の発達の变化を示す。

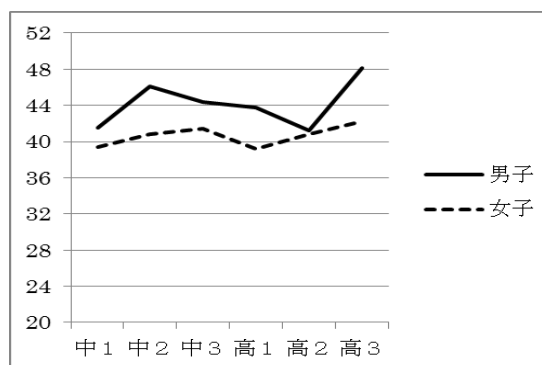


図4 攻撃性得点(全体)の発達の变化

生活不安と攻撃性との関連性の検討

生活不安と攻撃性との関連性について検討するため、LASSによって測定される生活不安得点(全体)によって調査対象者を3群に分け、男女別に一要因分散分析を行った。その結果、表3に示す通り、男子においては、「言語的攻撃」を除く、すべての下位尺度及び全体得点において、女子においては、「身体的攻撃」を除く、すべての下位尺度及び全体得点において、有意差が確認された。一般に生活不安水準が高い生徒ほど、攻撃性傾向が有意に高まる傾向が明らかになった。

表3 生活不安水準別攻撃性得点の平均値、および有意差

	生活不安水準			
	L群	M群	H群	F
短気	6.94	8.94	10.80	17.12***
	5.32	8.34	9.72	36.44***
敵意	11.58	13.23	15.23	23.69***
	11.59	12.63	14.89	31.64***
身体的攻撃	11.49	12.61	13.55	5.48**
	9.04	10.14	10.22	n.s.
言語的攻撃	9.23	9.45	10.18	n.s.
	8.07	10.19	10.42	16.26***
攻撃性得点	39.24	44.22	49.76	20.69***
	34.02	41.30	45.25	34.56***

注) 1: 上段が男子、下段が女子である。

2: *** $p < .001$, ** $p < .01$

そこで、さらに詳細に生活不安と攻撃性との関連について検討するために、生活不安を測定する LASS の各下位尺度得点および全体得点を目的変数、攻撃性を測定する BAQ の各下位尺度得点を説明変数として、男女別に重回帰分析を行った。その結果、表4に示す通り、男子は、標準偏回帰係数()の値から、特に「敵意」が生活不安と密接に関連していることがわかった。一方、女子は、「敵意」だけでなく、「短気」も生活不安と密接に関連していることがわかった。

**表4 生活不安と攻撃性との関係
<重回帰分析結果>**

(男子)	予期不安	評価不安	学校不適応	全体得点
短気	.10	.15	.24	.49
敵意	.24	.25	.28	.77
身体的攻撃	-.02	-.04	-.05	-.11
言語的攻撃	.06	.10	.03	.19
R ²	.26	.21	.31	.27
(女子)				
短気	.14	.24	.24	.69
敵意	.26	.17	.28	.69
身体的攻撃	-.18	-.15	-.05	-.37
言語的攻撃	.12	.16	.03	.28
R ²	.29	.22	.32	.30

**(3) 児童生徒の生活不安に関する国際比較
国際版児童生徒用生活不安尺度の開発**

日本のみならず、デンマーク、フィンランド、スウェーデンといった北欧諸国の児童生徒も対象にして、生活不安に関する国際比較を行った。まず、児童生徒が感じている生活不安に関する項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、最終的に、表5の通り、「国際版児童生徒用生活不安尺度」(20項目)が開発された。なお、下位尺度間の相関係数は、.38 から .53 という中程度の値を示した。また、生活不安得点は、各下位尺度を構成している項目の得点を単純加算する形で算出することにした。

表5 国際版児童生徒用生活不安尺度の因子分析結果(プロマックス回転)

項目内容	負荷量
(. 親子関係不安因子) = .85	
親との関係が良くないこと	.84
親がかまってくれないこと	.69
親に叩かれるかもしれないこと	.65
親に嫌われているかもしれないこと	.45
親に怒られるかもしれないこと	.42
(. 友達関係不安因子) = .86	
友達にいじめられるかもしれない	.79
友達に悪口を言われるかもしれない	.78
友達に無視されたらどうしよう	.63
仲間外れにされるかもしれないこと	.51
友達があまりいないこと	.44
(. 自己能力不安因子) = .87	
なかなか良い成績が得られないこと	.69
将来の夢が叶うかわからないこと	.62
何をやってもうまくいかないこと	.57
自分の将来のこと	.56
希望の学校に行けるかわからない	.55
(. 教師関係不安因子) = .89	
先生との関係が良くないこと	.63
先生がすぐ怒ること	.62
先生に怒られるかもしれないこと	.59
先生に注意されること	.53
先生が自分の良い所を認めないこと	.34

児童生徒における生活不安の性差の検討

児童生徒の生活不安の性差について、国別にt検定によって検討した。その結果、表6の通り、国を超えて、女子の方が男子よりも全体的に生活不安は高いことがわかった。

表6 生活不安得点の国別男女別平均値、標準偏差および性差

下位尺度	男子	女子	t
親子関係	1.95(2.80)	2.36(2.80)	2.16 [†]
	2.13(2.58)	4.43(2.71)	5.31***
友達関係	2.88(3.34)	3.38(3.36)	2.19 [†]
	3.22(3.11)	3.91(3.12)	2.96**
自己能力	6.24(3.87)	7.40(3.56)	4.60***
	4.94(3.26)	5.67(3.18)	3.04**
教師関係	3.03(2.90)	3.51(3.03)	2.41 [†]
	4.13(2.96)	3.84(2.78)	n.s.
全体	14.09(9.92)	16.65(9.59)	3.85***
	14.42(8.95)	15.86(9.16)	2.12 [†]

(注) 1: 上段が日本、下段が北欧である。

2: [†] $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

児童生徒の生活不安の国際比較

「国際版児童生徒用生活不安尺度」の各下位尺度ごとに、二要因分散分析(国×年齢)を行った。国別年齢別生活不安得点の平均値を表7に示したが、国において有意な主効果が認められたのは、友達関係不安($F=8.29, p < .01$)、自己能力不安($F=70.10, p < .001$)、教師関係不安($F=23.33, p < .001$)であった。具体的には、友達関係と

教師関係においては北欧の児童生徒の方が、逆に自己能力においては、日本の児童生徒の方が有意に不安の強いことが確認された。なお、生活不安全体においては、北欧と日本で有意な得点差は認められなかった。

一方、年齢において、有意な主効果が認められたのは、友達関係不安 ($F=8.37, p<.01$) と自己能力不安 ($F=5.21, p<.01$) であった。そこで、Tukey の多重比較を行った結果、友達関係に関しては、14歳以上の者が有意に不安が低く、逆に自己能力に関しては、14歳以上の者の方が有意に不安の強いことがわかった。なお、生活不安全体においては、有意な年齢差は認められなかった。

表7 生活不安得点の国別年齢別平均値および分散分析結果

	10歳	12歳	14歳	F
親子関係	2.12	2.25	2.08	国: <i>n.s.</i>
	2.70	2.56	2.14	年齢: <i>n.s.</i>
友達関係	3.95	3.46	2.62	国: 8.29*
	4.26	4.16	2.98	年齢: 8.37**
自己能力	6.20	6.79	7.14	国: 70.10***
	5.00	5.34	5.30	年齢: 5.21**
教師関係	2.99	3.82	2.98	国: 23.33***
	3.89	4.07	4.11	年齢: <i>n.s.</i>
全体	15.25	16.32	14.81	国: <i>n.s.</i>
	15.86	16.13	14.53	年齢: <i>n.s.</i>

(注) 1: 上段が日本、下段が北欧である。

2: * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

児童生徒の生活不安と怒りとの関連性

児童生徒の生活不安と攻撃行動の中核を成すと言われている怒りとの関連性について検討した。具体的には、「簡略版児童生徒用怒り尺度」の各下位尺度得点を目的変数、「国際版児童生徒用生活不安尺度」の各下位尺度得点を説明変数として、国別に重回帰分析を行った。その結果、表8の通り、日本も北欧も、親子関係不安が強いと親に対する怒り感情が高まるといった具合に、両者には密接な関連性のあることがわかった。また、特に教師との関係性において不安が高まると怒り水準全体がより高まることがわかった。

表8 生活不安と怒りとの関連(重回帰分析)

生活不安	怒り感情				
	友達	親	自分	教師	全体
(日本)					
親子関係	-.11	.41	.14	-.11	.33
友達関係	.26	-.14	.03	.01	.17
自己能力	.20	.23	.28	.16	.87
教師関係	.13	.11	.09	.60	.93
(北欧)					
親子関係	-.13	.24	-.10	-.09	-.18
友達関係	.21	-.07	.02	-.06	.10
自己能力	.16	.13	.34	.12	.70
教師関係	-.01	.15	.13	.47	.84

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

藤井義久、高校生活不安尺度の作成 - 進学校における適用と信頼性・妥当性の検討を中心に、教師教育研究、5巻、査読有、2014、3-14

藤井義久、中学生の生活不安と攻撃行動に関する研究、岩手大学教育学部附属教育実践総合センタ - 研究紀要、12巻、査読無、2013、221-233

藤井義久、母親に対する不満が児童の怒り感情に及ぼす影響、リベラルア - ツ、6巻、査読有、2012、19-27

[学会発表](計8件)

藤井義久、児童生徒の生活不安に関する国際比較研究(2) - 日本とフィンランドの比較、2015年3月20日、東京大学

藤井義久、児童生徒の生活不安に関する国際比較研究(1) - 日本とデンマ - クの比較、2014年11月8日、神戸国際会議場

藤井義久、児童期における遊び経験とキレやすさとの関係、2013年8月17日、法政大学

藤井義久、青年期における中学生の不安感情に関する研究: 東日本大震災後の調査結果を中心に、2013年5月11日、東北大学

藤井義久、青年期における生活不安の発達的变化に関する研究、2013年3月15日、明治学院大学

藤井義久、高校生の生活不安と攻撃行動との関連性の検討、日本心理学会第76回大会、2012年9月11日、専修大学

藤井義久、青年期における欲求不安経験が怒り感情に及ぼす影響、日本感情心理学会第19回大会、2011年9月3日、京都光華大学

藤井義久、児童生徒が抱えている問題とキレやすさとの関連性 - 日本とデンマ - クの比較、日本教育心理学会第53回大会、2011年7月25日、道民活動センタ -

[図書](計2件)

藤井義久 他、学文社、いじめによる子どもの自死をなくしたい、2014、170

藤井義久、金子書房、大学生生活不安尺度 (CLAS) マニュアル、2013、26

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井義久 (FUJII YOSHIHISA)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号: 60305258

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし